

# 選ばれざる道

人文学部 阿曾 史也くん（平成 25 年 3 月卒業）

**森の分かれ道では人の通らぬ道を選ぼう。すべてが変わる。**

[Robert Lee Frost(1874~1963)]

多くの学生は、ごく自然な流れで大学に入学し、目的があるような無いような大学生活を送っているのではないのでしょうか。私も、その一部であり、ほぼ同質の友人と漠然とした日常を過ごしておりました。大学生活という森の中の「道」は、多くの人にとって、多少の紆余曲折はあるにしろ、こんな感じに終わるのではないのでしょうか。

入学後、「自由」という言葉の意味を深く考えず、莫大な時間が無意識に経過し、いつの間にか墮落した日常に落ち着いていました。しかし、そういった私とは、明らかに異質の学生生活を過ごす人たちがいました。彼らは、同じ「自由」という言葉を受けて、違う「道」を進んでいたのです。平坦な「道」を進む、私自身に対する強烈的な危機感が生まれ始めたのが、この頃でした。

そんな私に、ある日、インターンシップへの参加の「決断」が迫られました。まさに、「森の中の分かれ道」が、目の前に現れたのです。これまでの「分かれ道」は、悩むことなく多くの人が進んだ道の方へ自然と進んでいました。しかし、人があまり進んでいない道に進む決断の仕方、そして、そもそもの分かれ道での悩み方が全くわからない状態でありました。ともすれば、この「分かれ道」での悩みを消すために、その道へ「進まない理由」を幾晩も掛けて練り上げ、教授に説明しました。

これまでの人生は、この方法で上手くいったのです。「それなら仕方がない。」という言葉を引き出せれば、「別のことで頑張ります。」と今まで通りの道に今まで通り向かえば済むのです。

しかし、教授との問答の末、私はその場で参加を決断しておりました。ふとした瞬間に問われた「なぜ、成長するチャンスを簡単に逃すのか？」という問いの答えが、当時の私自身に全くわからなかったからです。そして、初めて森の中で今まで選ばなかった「道」の方を向いたのです。

約2カ月後に、私は以前より軽やかな足取りで横浜や赤坂をスーツ姿で歩いていました。

あの分かれ道でわからなかった問いの答えが「変化することへの恐怖」であったことも、今なら答えられます。

しかし、新しい「道」を選んだはずの私が、引き返したいと思うことが起こりました。最も強烈で歩みを止めた大きな壁。それは、「自分のする仕事の意味」です。企画開発という将来的に必要な仕組み作りに関わる反面、直近で起こる他部署の出来事の方が重要な気がしていたのです。「そっちをやるほうが、役に立てる」と感じ、任せられていないことに取り組む結果、自分に求められていた仕事はいつの間にか、手つかずになっていました。

当時の私は、「高知に帰った方が良い」と喝を入れられるまで、そのことに気が付きませんでした。良いことをしていると思っていたのです。

思い返せば、現在の私ならもっとできることがあったと思います。というのも、インターン後には、以前の大学生活とは全く異なる「道」を歩み、多くの社会人と出会い、アルバイト先では新規事業にも加わったのです。自分の求められている仕事の意味を考え、求められるスキルやマインドへの飢えが、「道」を進むために必要なものを齎らしたからです。

これから先、分かれ道はたくさんあるでしょう。しかし、この大学生活での分かれ道は、長い人生という道の「スタート地点」ではないでしょうか。

<おわりに>

抽象的ではありましたが、以上が私の大学生活であります。直面している選択肢も、どれかを選ぶと、選ばれなかったものも出てきます。もし、いくつかの選択肢に直面し、自分自身が悩むのであれば、普段選ばないものを選んではどうでしょうか。私にとって、それがインターンシップでした。

大学生活を、これから先の人生の「原点」と捉えられるような経験。自分のルーツが、そこにあるかもしれません。